

2 各学級の授業づくりについて

(1) 各学級の研究テーマについて

各学級で幼児児童一人一人の指導課題を導き出した上で、今年度子供にどんな力を育てたいか、何を大切にしたいかなどを検討して研究のテーマや対象授業を決めた。各学級の研究テーマを表9に示す。

11月、12月の3回の研究日では、幼稚部、小学部1、2、3年生の低学年、小学部4、5、6年生の高学年の3グループに分かれて授業研究会を行った。この授業研究会もWeb会議システムのZOOMを活用して行った。事前に授業の指導案を配布し、録画した対象授業の動画を視聴することとした。その上で、研究テーマである育てたい力を基にした協議を行った。授業者が研究テーマである育てたい力を設定した理由や、授業づくりの経過、本時の授業について説明し、子供の評価を基に、参加した教師全員で、教師の関わり方や環境設定、教材・教具の工夫などについて協議をし、子供の変容に有効であったことや次の授業に向けて見直すことなどを整理した。

表9 各学級の研究テーマ

学部	学 級	研究テーマ	指導の場
幼稚部	ひよこ組	様々な活動を通して、教師と一緒に遊ぶことが楽しいと感じて関わる力	おべんきょうタイム
	りす組	教師や友達と遊ぶ楽しさを感じ、自ら関わったり、いろいろな活動に取り組んだりする力	設定遊び
	うさぎ組	様々な物に触れたり、経験したりする中で、興味・関心を広げ、主体的に学びに向かう力	設定遊び
小学部	1年生	教師の働き掛けに気付き、応じて、やり取りする力	国語・算数・自活
	2年生	健康や安全のために必要な生活動作や習慣を身に付け、自分から取り組む力	日常生活の指導
	3年生	自分の気持ちを伝えたり、相手の働き掛けに応じたりする力～支え合い、学び合える仲間を目指して～	いきいきタイム 日常生活の指導
	4年生	教師や友達と一緒に活動しながら「楽しい」などの気持ちを共有し、自分の気持ちを言葉や身振りなどで表現する力	いきいきタイム
	5年生	感覚を適切に受け止めたり、体の動きを自分で調整したりスムーズに動かしたりする力	自立活動
	6年生	友達と一緒に活動したり、友達と関わったりして学ぶ力	いきいきタイム

(2) 各学級の授業づくりの実際について

実際の各学級の授業づくりについて、幼稚部りす組、小学部3年生、小学部6年生の実践を報告する。

幼稚部りす組

「教師や友達と遊ぶ楽しさを感じ、自ら関わったり、
いろいろな活動に取り組んだりする力」を育む素材遊びの授業づくりについて

幼稚部りす組 教諭 吉元まお里 若林季 高山真美

I 授業づくりのテーマ設定の理由

本学級は、4歳と5歳の幼児5名で構成される年中学級であり、在籍する幼児は学校生活2年目となる。昨年度、年少児として1年間を幼稚部で過ごしたことで、幼稚部での生活にある程度見通しをもち、落ち着いて過ごせるようになってきている。新年度になり、教師や友達の入れ替わりがあったが、既に知っている教師や友達と一緒に遊ぶことを通して、新しい友達と同じ遊具で遊んだり、新しい教師に身振り等で「～したい」や「～が欲しい」などの思いを伝えたりするようになってきた。しかし、「～して遊ぼう」と教師を誘ったり、友達と追い掛けっこ等のやり取りをして遊んだりすることは少ない。運動遊びや素材遊びなどの設定遊びでは、トランポリンを繰り返し跳んだり、筆や手に絵の具を付けて画用紙に塗ったりするなど、興味をもった遊具や素材で繰り返し遊ぶようになってきた。しかし、興味のない遊具や素材は、教師が目の前で遊ぶ様子を見せても、遊ばないことがある。

そこで、教師や友達と一緒に遊んで「楽しい」と感じる経験を重ねて、「やってみよう」という思いをもち、教師や友達と同じ場所や物、遊び方で遊んだり、様々な遊具や器具、素材に興味をもって自ら関わって遊んだりするようになってほしいと考え、本テーマを設定した。

II 「小麦粉絵の具で遊ぼう」と「綿で遊ぼう」の授業について

1 幼児の実態

幼児らは、指絵の具や寒天など、これまでに遊んだ経験のある素材を使った遊びでは、筆で色を塗ったり、粘土カッターで切ったりするなどして、繰り返し遊ぶようになってきた。また、以前は、手や道具に素材が少し付いただけで泣いていた幼児が、素材が手に付いても平気になったり、自分から触ったりして遊ぶようになってきた。しかし、ホイップ絵の具等の遊んだ経験のない素材は、教師が遊ぶ様子を見せて遊びに誘っても興味をもてずに遊べなかったり、手だけではなくローラー等の自分が持っている道具に素材が付いただけで泣いてしまったりする幼児もいる。

2 題材設定の理由

そこで、小麦粉絵の具と綿を使った遊びを設定した。まず、小麦粉絵の具は、見た目は一般の絵の具と同じように見えるが、画用紙に塗ると色付きが薄く、どろどろ、にゆるにゆるとした感触である。幼児らが遊んだ経験のない新しい素材ではあるが、これまでの遊びと同じように、筆やローラーで塗ったり、手に塗って手形を押したりして遊ぶことができる。これまでの遊び方で遊びながら、見た目や感触などの違いに気付き、新しく触れる素材に興味をもって遊ぶことができると考えた。次に、綿は、昨年度、絵の具を溶いた色水に浸して遊んだことのある素材である。しかし、綿のみに触れて遊んだ経験はない。綿は、触れても手が汚れない素材である。また、綿に触れてふわふわの感触を楽しむだけでなく、綿を集めて埋もれる、綿が上から落ちてくる様子を見る、綿を袋の中に入れる、綿に色水を掛けて染めるなど、綿を使って様々な遊びへと展開できる。幼児らは、その中から好きな遊び方を見つけて、遊びに興味をもって自ら素材に関わり繰り返し遊ぶことができると考えた。

〈幼稚部りす組 授業づくり〉

3 指導計画

題材名	ねらい	指導内容	教材・教具	時間
小麦粉絵の具で遊ぼう	<ul style="list-style-type: none"> 小麦粉絵の具に興味をもち、筆や手で色を塗る。 教師や友達が遊ぶ様子を見て、同じように筆を動かして描いたり、ボトルから小麦粉絵の具を絞り出したりして遊ぶ。 	<ul style="list-style-type: none"> 小麦粉絵の具に興味をもつ。 小麦粉絵の具を画用紙に塗る。 小麦粉絵の具に触れる。 ボトルから小麦粉絵の具が出てくる様子を見る。 ボトルから小麦粉絵の具を絞り出す。 容器の中で小麦粉絵の具が移動する様子を見る。 	机 椅子 小麦粉絵の具 画用紙 筆 皿 ボトル 透明容器 雑巾 スマック	5
綿で遊ぼう	<ul style="list-style-type: none"> 綿に触れたり、ひげや雪などに見立てたりして遊ぶ。 教師や友達と一緒に、綿が上から落ちる様子を見て楽しんだり、綿に色水を掛けて色を付けたりにして遊ぶ。 	<ul style="list-style-type: none"> 綿に興味をもち、触る。 綿を集めたり、綿に埋もれたりする。 綿を袋に入れたり、出したりして遊ぶ。 頭上から落ちてくる綿を見る。 綿をサンタクロースのひげに見立てて遊ぶ。 綿に色水を掛けて遊ぶ。 	綿 マット 傘 サンタクロースの顔パネル 箱そり ビニール袋 醤油さし 机 椅子 スマック	4

III 授業づくりの経過

1 「小麦粉絵の具で遊ぼう」の経過

1 時間目	幼児の様子	<ul style="list-style-type: none"> 小麦粉絵の具、筆を見せると、興味をもって筆に絵の具を付けて画用紙に描いたり、手で小麦粉絵の具に触れたりして遊んだ。 教師がローラーを見せると興味を示して受け取ったが、教師がローラーに小麦粉絵の具を付けると嫌がり、ローラーを画用紙にこすり付けて小麦粉絵の具を拭おうとしたり、泣いたりする幼児がいた。 	 <p style="text-align: center;">写真 1</p>
	次時に向けて	<ul style="list-style-type: none"> 小麦粉絵の具が手に付くことが苦手な幼児が興味をもって遊べるように、ボトルに絵の具を入れた物を用意して、押し出して見せる。 小麦粉絵の具に興味をもてず泣いてしまった幼児は、集団の設定遊びの前に教師と一対一で小麦粉絵の具で遊ぶ時間を設定する。 	
2 時間目	幼児の様子	<ul style="list-style-type: none"> 教師がボトルから小麦粉絵の具を絞り出す様子を見たり、小麦粉絵の具を手で受け止めたりして遊んだ。自分でボトルから絞り出そうとする幼児もいたが、硬くて小麦粉絵の具が出てこなかった。 前回、遊びに参加できなかった幼児は、教師が「行くよ！3、2、1、ぴゅー！」等と掛け声を掛けてボトルから小麦粉絵の具を勢いよく出して見せると、笑顔で見ている。ボトルを指さしたり、ボトルを持って教師に手渡したりして、「もう1回」と伝えて、繰り返し教師に小麦粉絵の具を出してもらって楽しんだ。 	
	次時に向けて	<ul style="list-style-type: none"> 教師がボトルから小麦粉絵の具を絞り出すことを期待して楽しめるように、掛け声を掛けてから小麦粉絵の具を絞り出して見せるようにする。 「やってみよう」という思いをもって、自分でボトルを持ち小麦粉絵の具を出して遊べるように、小麦粉絵の具の硬さを柔らかくして出しやすくする。 容器に水を入れた物を用意し、水の中に小麦粉絵の具を絞り出して遊べるようにする。 	

＜幼稚部りす組 授業づくり＞

3～5 時間目	幼児の 様子	<ul style="list-style-type: none"> 小麦粉絵の具を柔らかくすると、自分でボトルを押して小麦粉絵の具を絞り出して遊ぶようになった。 前時までは、教師がボトルから小麦粉絵の具を出す様子を見て楽しんでいた幼児が、ボトルを自分で持ち、小麦粉絵の具を出して遊んだ。 	 <p>写真2</p>
	次の題材 に向けて	<ul style="list-style-type: none"> 容器から素材を出す、「わー！」や「それー！」の掛け声を掛けながら遊ぶなど、幼児が好きな遊び方や関わり方で遊びに誘う。 集団での素材遊びで、絵の具等苦手な素材を扱う場合は、集団での遊びを実施する前に教師と一対一で素材に触れて遊ぶ時間を設定する。 	

2 「綿で遊ぼう」の経過

1 時間	幼児の 様子	<ul style="list-style-type: none"> 綿に興味をもち、綿を集めたり、綿を丸めて投げたりして遊ぶ幼児もいたが、綿に興味をもてず、教師が綿を見せて遊びに誘っても綿に触れようとしなかったり、教室から出て行こうとしたりする幼児がいた。 サンタクロースの顔のパネルに、ひげに見立てた綿を貼る活動は、多くの幼児が興味をもたず、取り組んだ幼児は一人だった。 	 <p>写真3</p>
	次時に に向けて	<ul style="list-style-type: none"> 幼児らが、綿に触れたり埋もれたりして遊べるように、箱そりを用意し、箱そりの中に綿を敷き詰める。 綿に興味をもてるように、おもちゃ等のない環境を設定する。 綿に興味をもてなかった幼児は、集団での遊びを設定する前に、教師と一対一の遊びを設定し、事前に綿で遊ぶ経験をする。 綿に色水を掛けて色を付ける遊びを設定する。何をするのか、どのようにするのか分かり、「やってみよう」という思いをもって取り組めるように、教師の手本動画を見る時間を設定する。 	
2～4 時間目	幼児の 様子	<ul style="list-style-type: none"> 袋の中の綿を出したり、箱そりの中に綿を入れて、自分も中に入り、綿に触れながら教師に箱そりを引っ張ってもらったりするなどして、幼児全員が綿に触れて遊んだ。 綿に色水を掛ける遊びは、教師の手本動画をよく見ていた。動画が終わり、教師が綿と色水の入った醤油さしを出して見せると、数名の幼児は興味をもち、繰り返し綿に色水を掛けて遊んだ。取り組まない幼児もいたが、友達や教師が色水を掛けているところに近付いて椅子に座り、その様子を笑顔で見ている。 	 <p>写真4</p>
	次の題材 に向けて	<ul style="list-style-type: none"> 幼児が苦手ではないと思われる素材でも、初めての素材を扱って遊ぶ前には、教師と幼児が一対一でじっくりと遊ぶ時間を設定するようにする。 素材に興味をもち、幼児らが他の場面で楽しんでいる遊び方で遊べるように、教材を用意したり、環境を整えたりする。 	

IV 幼児の変容の結果

＜幼児の変容＞	＜効果的だったこと＞ 目標設定、指導内容・方法、教師の関わり方、 教材教具、など				
<ul style="list-style-type: none"> 小麦粉絵の具や綿などの素材に興味をもって、教師や友達が遊ぶ様子を見るようになった。 	<table border="1"> <tr> <td>目標設定</td> <td>指導内容・方法</td> </tr> <tr> <td colspan="2"> <ul style="list-style-type: none"> 最初は素材に触れて遊ぶのではなく、素材が容器から出てくる様子を見たり、上から降ってくる様子を見たりして、幼児らが好きな遊び方で遊べるようにしたこと。 </td> </tr> </table>	目標設定	指導内容・方法	<ul style="list-style-type: none"> 最初は素材に触れて遊ぶのではなく、素材が容器から出てくる様子を見たり、上から降ってくる様子を見たりして、幼児らが好きな遊び方で遊べるようにしたこと。 	
目標設定	指導内容・方法				
<ul style="list-style-type: none"> 最初は素材に触れて遊ぶのではなく、素材が容器から出てくる様子を見たり、上から降ってくる様子を見たりして、幼児らが好きな遊び方で遊べるようにしたこと。 					

〈幼稚部りす組 授業づくり〉

<ul style="list-style-type: none"> 指さしや身振り、言葉などで、「もっと～してほしい」という思いを繰り返し教師に伝えて遊びを楽しむようになった。 	<p>教師の関わり方</p> <ul style="list-style-type: none"> 教師からの関わりを期待して見ることができるよう、「3, 2, 1！」や「せーの!」、「それー！」などの掛け声を掛けながら、素材を容器から出したり、頭上から降らせたりして、幼児らが好きな関わり方で誘い掛けたこと。
<ul style="list-style-type: none"> 遊び方が分かると、「やってみよう」という思いをもって、自分で物を操作して遊ぶようになるようになった。 	<p>指導内容・方法 教材教具</p> <ul style="list-style-type: none"> 身近な教師と一緒に素材とじっくりと向き合うことができるように、教師と一対一で遊ぶ場面を設定し、教師が楽しそうに遊ぶ様子を見せるようにしたこと。 遊び方が分かるように、教師の手本動画を見る時間を設定したこと。

V まとめ（子供の力を育てるための授業づくりのポイント）

1 子供が好きな遊び方や関わり方で教師が遊びに誘うこと

これまでの素材遊びでも、ホイップ絵の具を絞り器から絞り出して見せたり、細かく破いた新聞紙を頭上から降らせたりするなど、様々な素材を容器から出したり、頭上から降らせたりして遊んできた。幼児らは、その遊びに興味をもって、教師が繰り返し容器から出したり、頭上から降らせたりする様子を笑顔で見て楽しんでた。また、他の遊びの場面で、教師が「さて、さて！」と言って幼児を追い掛けると、追い掛けられることを期待して教師と視線を合わせたり、幼児が教師に近付き、教師が大きな動きや声、表情で「うわー！」と言うと、幼児が逃げていくやり取りを楽しんだりしてきた。素材に触れて遊ぶことが苦手な幼児には、素材を容器から出したり、頭上から降らせたりするなどの好きな遊び方で誘ったり、大きな声や動き、表情などで「うわー！」等、幼児が好む言葉掛けをしながら関わったりすることが大切であると考えた。

2 他の場面と共通の掛け声や教材を使用すること

小麦粉絵の具や綿を使った遊びでは、「3, 2, 1！」や「せーの、それ！」などの掛け声を掛けてから小麦粉絵の具をボトルから絞り出したり、綿を子供たちの頭上に降らせたりして見せた。幼児らは、素材が出てきたり落ちてきたりする様子を期待して見て、「もっと～してほしい」という思いを、身振りや発声などで繰り返し教師に伝えて遊んでいた。この掛け声は、他の場面でも、教師の存在に気付き注目してほしいときに使用している。また、綿を使った遊びでは、他の遊びで使用していた箱そりに綿を敷き詰めて遊ぶようにしたこと、子供たち自ら箱そりに乗って、そり遊びを楽しみながら綿に触れて遊んでいた。他の場面で使用している掛け声や教材を共通して使用することで、興味のない遊びでも、「楽しそう」、「やってみよう」などの思いをもつことができると考えた。

3 新しい遊びに取り組むときは、教師と幼児が一対一で遊び、じっくり素材に関わる時間を設定すること、また、教師の手本動画を見る時間を設定し、やることややり方が分かるようにすること

集団の遊びを設定する前に、教師と一対一で遊ぶ時間を設定したことで、他の遊びやおもちゃに気持ちは向かうことなく、新しい素材に気付き、向き合っ遊ぼうとしていた。加えて、教師の手本動画をよく見て、「やってみよう」という思いをもって同じように遊んだり、取り組もうとしたりしていた。これらのことから、子供たちになじみのない素材で遊んだり、新しい遊び方の遊びを設定したりするときは、その遊びに興味をもつことができるように、集団で遊ぶ前に教師と一対一で遊ぶ時間を設定したり、教師の手本動画を見たりすることが大切だと考えた。

小学部3年

「自分の気持ちを伝えたり、相手の働き掛けに応じたりする力 ～支え合い、学び合える仲間を目指して」を育む生活単元学習の授業づくりについて

小学部3年 教諭 高井彩子 五反田明日見 上野哲弥

I 授業づくりのテーマ設定の理由

本学級では、身近な教師が児童と一緒に楽しく遊ぶことや、児童の思いを受け止め、共感することを通して、児童との信頼関係を築くことを大切にしてきた。児童たちは、自分のやりたいことや欲しい物を身振りや言葉で教師に伝えたり、教師の働き掛けを受け入れて行動したりすることが少しずつ増えてきた。しかし、自信がないことや、見通しがもてないこと、理解できないことに対しては、「いやなの。」等と言ったり、泣いたり、怒ったりして拒否することがある。また、友達に対して自分の気持ちを相手に伝わるような身振りや言葉で表現したり、友達からの働き掛けを受け入れて行動したりすることはまだ難しく、友達同士でやり取りする場面は少ない。

研究テーマを設定するに当たって、児童たちが本校を卒業するときに、どのような姿になってほしいかを考えた。私たちは、身近な教師とのやり取りを通して、様々なことに挑戦するようになってきた児童が、6年生になったときには、「〇〇君と一緒にやりたいから、誘ってみよう」、「〇〇ちゃんのやり方をまねしてやってみよう」、「みんなと一緒にだったら頑張れる」など、友達と関わり、支え合いながら、自信をもって様々な物事に取り組み、新たなことを学んでいってほしいと考えた。

そこで、研究テーマを「自分の気持ちを伝えたり、相手の働き掛けに応じたりする力を育む授業づくり」とし、いきいきタイム（生活単元学習）の「お話遊び」の授業研究に取り組むこととした。

II 授業について

1 児童の実態

本学級には、男子4名、女子2名の児童が在籍している。児童たちは、追い掛けっこをすることや、絵を描くこと、水や砂、スライムなどといった形が変化する素材を使って遊ぶこと、絵本を読むこと、キーボードを弾くことなど、一人一人に好きな遊びがある。教師と一緒に遊んだり、一人で遊んだりすることが多いが、教師を介して、友達と物や道具の貸し借りをしたり、友達と同じようなやり方で遊んだりするなど、友達と物や場を共有するようになってきた。

また、「～ちょうだい。」や「いない。」、「〇〇先生、～しないで。」などの言葉や、手を合わせること、物を指差すこと、教師の手を引くことなど、身振りや動作を使って自分の思いを表現できる。

様々な実態の児童たちではあるが、絵本の読み聞かせは、どの児童も好きな活動の一つである。昨年度実施した教師自作の絵本を使った「お話遊び」の授業を通して、教師の言葉をまねて、「ねえねえねえ。」と呼び掛けたり、教師の語り掛けた言葉や話の展開に合わせて教材・教具を動かしたりするなど、教師とのやり取りを楽しむとともに、話の内容を理解し、次の展開を期待する力が育ってきた。

2 単元設定の理由

本単元では、「さつまのおいも」（文：中川ひろたか、絵：村上康成、童心社）という絵本を用いることとした。この絵本は、さつま芋が擬人化して表現されており、御飯を食べることや、歯を磨くこと、運動することなど、児童にとってなじみのある生活場面が取り上げられている。また、さつま芋のつるを引っ張って収穫することや、たき火をして焼き芋を作ることという児童が体験したことのあ

〈小学部3年生 授業づくり〉

る場面が子供たちの絵とともに楽しそうに描かれている。

以上のことから、児童は、この絵本の内容に親しみや興味をもつことができると考えた。また、絵本の展開に合わせて、教師や友達と一緒に声を出したり、友達と力を合わせてつるに見立てたひもを引っ張ったりするなど、絵本の場面を再現する活動に取り組むことを通して、友達や教師との関わりを楽しんだり、友達に自分がやってみたいことを伝えたり、「もっとやってみたい」、「友達のように表現したい」といった意欲を育むことができると考える。

さらに、一人ではできないことでも、友達と一緒にあれば達成できたという経験を楽しみながら積み重ねることを通して、児童は、友達と一緒に取り組むことの心地よさや喜びを感じるとともに、集団としての一体感を味わうことができると考え、本単元を設定した。

3 指導計画

次	ねらい	指導内容	教材・教具	時間
一	<ul style="list-style-type: none"> 絵本の内容や展開を理解する。 自分もやってみたい、まねしたいという気持ちをもつ。 	<ul style="list-style-type: none"> 絵本の読み聞かせや、絵本の展開に合わせて教師が演じる様子を見聞きする。 	絵本 めくり台 さつま芋の服 さつま芋の模型	2
二	<ul style="list-style-type: none"> 教師の言葉や動きをまねしたり、絵本の内容を再現したりすることを楽しむ。 教師や友達に働き掛けたり、働き掛けに応じたり、自分で考えた動きを表現したりするなど、教師や友達と関わり合いながら活動に取り組む。 絵本を介して、友達と関わり合い、一緒に物事に取り組む経験をjする。 	<ul style="list-style-type: none"> 絵本や教師の動きに視線を向け、掛け声を掛けたり、内容に合わせた動作をしたりする。 話の内容に応じて、自分の思いを教師や友達に身振りや言葉で伝える。 教師や友達からの働き掛けに応じて、動きを見たり、合わせたりする。 友達と一緒に掛け声を掛けたり、つるを引っ張ったりする。 	帽子 つる（綱） 御飯、風呂、歯 ブラシ、トイレの模型 タオル 拍子木 パフパフラッ パ	4

Ⅲ 授業づくりの経過

以下、授業づくりの経過として、教師と児童、児童同士の関わりや、児童の自発的な表現がどのような指導を通して、どのように変容してきたかを述べる。

1 教師と一部の児童とのやり取りが中心で、児童の自発的な表現が少ない（1～2時間目）

絵本の内容や物の名称、動作を表す言葉を教えるために、さつま芋の模型等、具体物を用いて絵本の読み聞かせを行った（写真①）。児童の中には、絵本の展開を知っており、自ら絵本をめくったり、模型を準備したりと意欲的に取り組む者がいた一方で、活動の意味を理解することが難しく、その場を立ち去ろうとする児童もいた。以下のエピソードは、「さつま芋を引き抜く場面」の児童の様子である。



写真①

さつま芋を引き抜く場面では、A児とB児がつるを持ち、引っ張った。うまく抜くことができないと、A児が「みんな、手伝って。」「みんな、抜けて。（抜いて）」と大きな声を発した。その様子をE児とF児は見ているが、自ら立ち上がったたり、つるを持ったりすることはなかった。また、C児は落ち着かない様子で立ち歩いたり、D児は「トイレ。」と言って教室から出ようとしたりしていた。

児童たちは教師が演じる様子を見てはいるが、まねして動いたり、せりふを言ったりすることが少なかった。また、動きに合わせて御飯や風呂などの模型を使用したがるが、その都度、模型を替える必要があり、活動が中断してしまうため、模型の数を精選することとした。また、児童全員が、絵本に出てくる

〈小学部3年生 授業づくり〉

言葉や動きの面白さに気付いて、話したり、動いたりできるように、「おもしろくらし」（作詞・作曲：中川ひろたか、編曲：大友剛）（以下、既成の音楽）を使用して展開することにした。

2 既成の音楽を使用したことで見えてきた、児童たちの反応の違い（3時間目）

既成の音楽をピアノで弾き語りしたことで、教師の話聞く場面と、動く場面の違いが分かりやすくなった。特に、さつまいもがトレーニングをする場面では、B児とE児が腕立て伏せのまねをしたり、F児がさつまいも役の教師と一緒に走ったりと、児童が自ら表現することが増えた（写真②）。しかし、既成の音楽を嫌がる児童もいた。次のエピソードは、授業中のA児の様子と、授業終了後のA児と筆者との会話である。



写真②

教師が既成の音楽を歌い始めると、A児は、退室しようとしたり、教師におぶさったり、ひざの上に乗ったりして、一人で活動に取り組むことが難しくなった（写真③）。授業終了後、筆者がA児に「歌、嫌いだった？それとも、ピアノが嫌？」と尋ねると、「歌、嫌い。ピアノ、好き。」と答えた。筆者が「分かった。じゃあ次は歌、やめようね。」と伝えると、小さな声で「やめようね。」と繰り返す言い、ほっとした表情になった。

既成の音楽を使用したことで、複数の児童は自発的に動いたり、教師のまねをしたりすることができた。しかし、既成の音楽が苦手な児童がいることが分かったため、その音楽は使用しないこととした。

また、指導目標や指導内容について検討した。「さつまいものおいも」という絵本の世界観を味わい、楽しむこと、その上で、自分の気持ちを身振りや言葉で表現したり、相手の働き掛けを受け入れたりすることが目標であることを再度確認し、展開や教材を見直していくこととした。



写真③

3 児童たちの表現の広がり（4～5時間目）

前時の指導の反省を踏まえ、本時から拡大絵本やさつまいもを模した児童用の帽子、落ち葉を模したフェルト生地などの教材を追加した。また、既成の音楽は使用せず、A児も好みそうな拍子木やパフパフラップを、さつまいもの動きや場面が変わるときに鳴らすことにした。さらに、スムーズに展開できるように、絵本を読み進める教師と、さつまいも役を演じる教師とで役割を分けることにした。すると、以下のエピソードのような姿が見られるようになった。

さつまいもがトレーニングをする場面で、B児とE児は教師の伸脚や腕立て伏せをまね、C児は教師の周囲を歩きながら動きを見ていた。また、D児は、笑顔で立ち上がり教師に近付いた。

さつまいもが泳ぐ場面では、これまで椅子に座って静かに眺めていることが多かったF児が「水遊び。」と話す。次に、さつまいもを引き抜く場面では、これまでは教師に促されてつるを持っていたC児とD児が、自分で綱を持ち、「ずっぽ～ん。」と抜けた後、にっこりと笑顔になった。

おならを出し合う場面では、B児が「そしたら…。」と言うと、A児が「えっ！」と言って、次の展開につながるような表現をしていた。

児童が自ら動きだしたり、教師の動きや言葉をまねたり、展開に合わせてせりふを言ったりするなど、一人一人の表現が多様になってきた。また、教師の役割分担によって展開がスムーズになってきたため、1、2時間目で使用していた模型を再度使うことにした。

4 児童たちの表現がさらに広がり、児童同士での関わりが増える（6時間目）

御飯を食べる場面では、児童たちが好むふりかけの模型を使用すると、B児、C児、D児、F児が一斉に集まり、ふりかけを掛けるD児の動きに注目した。歯磨きの場面では、歯ブラシの模型を動かして自分や教師の歯を磨くまねをしていたB児が、D児の歯を磨き始めた。D児はそれを受け入れ、その様子を見ていたF児が、同じように歯を磨き始めた。

＜小学部3年生 授業づくり＞

また、さつま芋を引き抜く場面で、複数の児童が集まってきてつるを持ったり、「ずっぱ〜ん」と抜けるタイミングに合わせて、E児が拡大絵本をめくったりすることもあった。

C児は、相手の動きに合わせてたり、まねたりすることが難しい児童である。以下は、C児が友達の動きを見て、初めて同じ動きで絵本の一場面を表現したエピソードである。(写真④)



写真④

B児が前方に出てきて、腕立て伏せのまねを始めた。C児がB児に視線を向けたとき、C児の正面にいた教師が「B児ちゃん、すごい。」と指差しながら伝えると、C児は、B児の隣に行き、B児の姿勢をまねるように四つばい姿勢になり、体を上下に動かして、B児の顔をのぞきこんだ。

このように、児童同士がやり取りしたり、互いをまねしたりするようになり、教師が想定していなかったような多様な表現が生まれた。

IV 児童の変容の結果

＜児童の変容＞	＜効果的だったこと＞ 目標設定、指導内容・方法、教師の関わり方、教材教具、など				
・教師や友達に注目するようになった。	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 50%; border: 1px solid black;">教師の関わり方</td> <td style="width: 50%; border: 1px solid black;">教材教具</td> </tr> <tr> <td colspan="2" style="padding: 5px;">・具体物を使ったり、擬態語で語り掛けたりして、見せ方、聞かせ方を工夫して、話の内容を理解できるようにしたこと。</td> </tr> </table>	教師の関わり方	教材教具	・具体物を使ったり、擬態語で語り掛けたりして、見せ方、聞かせ方を工夫して、話の内容を理解できるようにしたこと。	
教師の関わり方	教材教具				
・具体物を使ったり、擬態語で語り掛けたりして、見せ方、聞かせ方を工夫して、話の内容を理解できるようにしたこと。					
・自ら動いたり、話したりすることが増えた。	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 50%; border: 1px solid black;">教師の関わり方</td> <td style="width: 50%; border: 1px solid black;">教材教具</td> </tr> <tr> <td colspan="2" style="padding: 5px;">・児童の表現を見逃さず、認め、せりふや動きを取り入れて授業を展開したこと。絵本の世界観を味わえるような、教材を作成・使用したこと。</td> </tr> </table>	教師の関わり方	教材教具	・児童の表現を見逃さず、認め、せりふや動きを取り入れて授業を展開したこと。絵本の世界観を味わえるような、教材を作成・使用したこと。	
教師の関わり方	教材教具				
・児童の表現を見逃さず、認め、せりふや動きを取り入れて授業を展開したこと。絵本の世界観を味わえるような、教材を作成・使用したこと。					
・教師や友達のまねをすることが増えた。	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 100%; border: 1px solid black;">指導内容・方法</td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">・「○○くんが～やっているよ。」と言って、他の児童の注目を集めたり、友達の動きを見る時間を確保したりしたこと。</td> </tr> </table>	指導内容・方法	・「○○くんが～やっているよ。」と言って、他の児童の注目を集めたり、友達の動きを見る時間を確保したりしたこと。		
指導内容・方法					
・「○○くんが～やっているよ。」と言って、他の児童の注目を集めたり、友達の動きを見る時間を確保したりしたこと。					
・教材を使って友達に働き掛けた友達からの働き掛けを受け入れるようになった。	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 100%; border: 1px solid black;">教師の関わり方</td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">・具体物を使って見せたり、児童一人一人に働き掛けたりしたこと。また、児童からの働き掛けを教師自身が受け入れたこと。さらに、他の児童にも働き掛けるよう促したこと。</td> </tr> </table>	教師の関わり方	・具体物を使って見せたり、児童一人一人に働き掛けたりしたこと。また、児童からの働き掛けを教師自身が受け入れたこと。さらに、他の児童にも働き掛けるよう促したこと。		
教師の関わり方					
・具体物を使って見せたり、児童一人一人に働き掛けたりしたこと。また、児童からの働き掛けを教師自身が受け入れたこと。さらに、他の児童にも働き掛けるよう促したこと。					

V まとめ（子供の力を育てるための授業づくりのポイント）

1 お話遊びそのものを十分に理解し、楽しむこと

まずは、児童が絵本の内容を理解して、「やってみたい」と思える授業となるように、展開や教材を工夫した。児童それぞれの楽しみ方や好きな場面を、表情や動き、言葉から考え、受け止め、3年生オリジナルの展開を作り上げた。児童は表現が受け止められたことで、さらに表現することが増えた。

2 反復しながら発展させていくこと

毎回の授業で児童の反応を確認し、絵本の世界観を大切にしながら、少しずつ発展させるようにした。その中で、単元の始めでは、話の内容や授業の展開が分からず、離席、退室していた児童が、自ら具体物を使って動いたり、促しを受けて話したりして、授業に取り組むことができるようになった。

3 やり取りする場면을教師が限定しないこと

単元の始めでは、さつま芋を引っ張る場面をやり取りの場面として考えていたが、それ以外でも、関わり合う姿が多く見られた。教師がやり取りの場면을限定せず、児童の表現を受け止め、他の児童にも伝えたことで、児童同士のやり取りが生まれ、学び合う姿につながったのではないかと考える。

小学部6年

「友達と一緒に活動したり，友達と関わったりして学ぶ力」を育む
生活単元学習の授業づくりについて

小学部6年 教諭 山地康代 久野智宏 中島篤

I 授業づくりのテーマ設定の理由

小学部6年生5人の集団である。多くの児童が6年間、同じ教室で一緒に学校生活を送ってきた。友達の名前を知り、「6年生。」と呼び掛けられると返事をする等、学級への所属意識はあるが、友達と場や活動を共有して活動することが難しい児童や、友達の名前を呼び掛けたり、児童同士が関わって学んだり遊んだりすることが少なく、教師と関わって過ごす児童が多い。だが、友達の様子を見たり、教師を介して友達と関わったりする様子も見られるため、教師との関わりを基盤に、友達と一緒に活動したり、友達と関わったりして学ぶ力を育むことで、友達と関わることの楽しさを味わい、自分から友達に関わり、友達とやり取りしながら生活してほしいと考え、本テーマを設定した。

II 生活単元学習（いきいきタイム）の授業について

1 児童の実態

生活単元学習（以下、いきいきタイム）では、お話遊びや水遊び、畑で野菜を育てる活動などをしてきた。活動内容に興味をもち、教師や友達と一緒に学習する児童が多いが、活動内容の見通しをもてない不安からか学習に参加できない児童がいる。友達の様子を見てその動きをまねたり、自分の役割をもち、理解して取り組んだりする児童はいるが、教師の介在を必要とすることが多く、友達と一緒に一つのことに取り組んでいるという実感をもっている児童は少ないと考える。

2 単元設定にあたって

年間を通し、進路や成長、行事などに関する生活全般の単元、校外学習や修学旅行の単元、遊びの単元を計画し、取り組んでいる。単元を設定するにあたっては、児童の興味・関心のあることや生活のまとまりを考慮し、体を動かしたり、物を操作したりする学習をしながら、友達や教師と関わり合える場面を設定したいと考えている。また、これまでの経験をもとに、新しいことを学ぶ機会としても捉えている。

3 指導計画（年間指導計画より抜粋）

単元名及び指導期間	テーマに関する単元のねらい	テーマに関する学習内容
夏祭りをしよう 全8時間	・遊び場を自分たちで作ったり、友達と一緒に遊んだりする。	・遊び場で使用する物や看板などを作る。 ・店員とお客さんの役割に分かれて、遊ぶ。
修学旅行で箱根に行こう 全30時間	・箱根の特色を知り、それに応じた活動を教師や友達と一緒に体験する。 ・友達や教師と一緒に活動したり宿泊したりすることを通して、楽しい思い出をつくる。	・日にちや場所、箱根の特色などを知り、しおりを作る。 ・修学旅行の活動を事前に体験する。 ・思い出を写真や素材を使って表現する。
レベルアップ授与式をしよう (月1回、全8回)	・自分や友達、学級が頑張ったことを振り返り、互いを褒め合う。	・一カ月ごとに頑張ったことを、写真を見て振り返り、児童それぞれと学級全体に教師から表彰状を受け取る。

〈小学部6年生 授業づくり〉

Ⅲ 授業づくりの経過

1 「夏祭りをしよう」の経過

児童の様子	指導の評価
<ul style="list-style-type: none"> ・遊び場づくりでは、自分のやりたいお店を選び、教師と一緒に準備するが、友達の様子をあまり見ていない。 ・客役の児童が焼きそばを作ろうとすることがあった。店員役は、遊びに誘い掛ける言葉や何をするのかが分からず、立っていたり、場を離れたりすることがある。 ・チケットや遊び場の物を渡すことはできるが、視線を合わせていることが少ない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・友達を意識できるように、グループ別にしたり、活動を分担したりするなど、友達と同じ目的で活動することが分かるための工夫が必要である。 ・店員は何をするかが分かるように、操作する物を順番に置く等して環境を整える。教師も店員役と客役になり、「いらっしゃい。」「どうぞ。」などと、役割に応じた言葉の手本を示し、一緒に遊ぶ。 ・「〇〇くん、どうぞ。」等、名前を呼んで関わるのが生活の中でも少ない。
<p>単元全体の評価：単元の目標であった「友達と一緒に遊ぶ」ことが難しく、教師と一緒に遊んだり活動したりする児童が多かった。活動の場から離れる児童もいて、目標設定が高かったと考える。「〇〇遊び」という一つのテーマで遊ぶ経験が少ないことや、普段の生活から友達の様子を気にすることが少ないことも関係していると考え。また、児童同士の関わりが生まれるように、友達の名前を呼ぶ機会を設定する等、教師と一緒に活動しながら児童と児童をつなぐことを意識して指導したい。</p>	

2 「修学旅行で、箱根に行こう」の経過

児童の様子	指導の評価
<ul style="list-style-type: none"> ・スライドの写真やイラスト、文字を見て、その名前を言ったり、文字を読んだりする児童が多く、友達の言葉を聞いて、「海賊船。」等と答える児童がいた。姿勢が崩れたり、画面を見ていなかったりする児童もいた。 ・かまぼこ作り等の体験的な学習では、友達の様子をちらりと見ることがあった。教師が友達の様子を伝えると様子を見たりまねしようとしたりするが、自分から見るとは少なかった。 ・「〇〇さん、一緒にやろう。」と自分から友達を誘う児童がいた。 ・教師の合図に合わせ物を操作した児童が複数いた。隣の児童を見ることもあった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・スライドを見たり文字を読んだりしながら、活動を共有している。児童が文字を読んでいる間は、教師は言葉を掛けず、友達の声が聞けるようにする。スライドの文字は多くなりすぎないように配慮する。 ・友達の様子を見るのは、自信がないときに、友達の様子からヒントを得ようとしているのではないか。感染症対策で、児童同士の距離を取っているため、互いの子が見えにくい。 ・授業の始めに、みんなで一つの物を作ることを伝えたことで、友達を誘ったのではないか。 ・教師の合図に合わせ、同時に活動することは、友達を意識することにつながるのではないか。
<p>単元全体の評価：友達の言葉を聞いて、スライドを見たり言葉を言ったりするなど、教材・教介して活動を共有する場面があった。友達を見たり、誘ったりするなど、友達を気にする様子が1学期に比べると増えている。制作活動では、友達の様子が見えるように配置を工夫するとともに、教師が友達の様子を伝えていきたい。また、「〇〇くんを見てごらん。」という言葉掛けでなく、「〇〇くんは何をしていた？」と聞いたり、ときには見守ったりすることも必要であると考える。</p>	

3 「レベルアップ授与式をしよう」の経過

児童の様子	指導の評価
<ul style="list-style-type: none"> ・6～7月は、その月の学習についての写真を見て、その様子を教師に伝えるが、賞状をもらうことや、友達を褒めることまでに至らない。 ・8～11月は、友達は何をしているのかを聞くと、写真の様子を説明する児童が増えた。自分の賞状をよく見るが、友達が賞状 	<ul style="list-style-type: none"> ・なぜ賞状をもらうのか、賞状の価値が分からず、友達のことまで意識が向きにくい。学習の流れを変えず、児童の様子を見ていく。 ・学習内容が分かり、家庭で褒められることにより、自分の賞状をよく見るが、友達も褒められていることまでつながらない。学級の賞状は代表者が受け取るため、自分たちが表彰さ

<小学部6年生 授業づくり>

<p>をもらう様子に注目する児童は少なく、学級全体の表彰にも、注目していない。</p> <ul style="list-style-type: none"> 12月は、個人の賞状をスライドに映すと、友達の賞状も見ていた。「6年生の表彰をします。」と言うと、「修学旅行。」と答えた児童がいた。 	<p>れていることが分からない。</p> <ul style="list-style-type: none"> 友達の賞状を見て、自分の賞状との違いに気付いたのかもしれない。修学旅行は、友達と一緒に活動したという実感があつたのではないか。
<p>単元全体の評価：自分が褒められることにうれしさを感じるようになったが、友達を気にしたり、自分から拍手をしたりする児童はいない。12月は、修学旅行が表彰の対象だったため、自分たちの体験として印象に残ったのではないか。他の授業で自己評価をしたときに、できた/できないの評価をする児童がいた。1月からは自分たちで決めた生活目標を評価して表彰するようにしたい。</p>	

IV 幼児・児童の変容の結果

<児童の変容>	<効果的だったこと> 目標設定、指導内容・方法、教師の関わり方、教材教具、など
<ul style="list-style-type: none"> 友達と一緒に場を共有する。 友達と同じ活動をする。 	<p>指導内容・方法</p> <ul style="list-style-type: none"> 「やってみよう」、「できた」などの充実感や達成感がもてるように、生活に関連すること、興味関心のあること、新たに興味をもちそうなこと、活動量などを考慮し、学習を組み立てた。 物を操作したり、体を動かしたりする学習を取り入れた。 何度か同じ方法や流れを繰り返し、安心して参加できるようにした。
<ul style="list-style-type: none"> 友達の声を聞く。 	<p>教師の関わり方 教材教具</p> <ul style="list-style-type: none"> 友達の声が聞こえるように、教師が聞く様子を示す。その後、「〇〇くんは何と言っていた？」等と問い掛けた。 読みやすく聞きやすい文字の量にするように配慮した。
<ul style="list-style-type: none"> 友達の様子を見る。 	<p>教師の関わり方 環境設定</p> <ul style="list-style-type: none"> 友達の様子に注目できるように、「〇〇くん、□□しているよ。」と注目してほしいことを具体的に伝えた。 友達の様子が見えるように、机や椅子を配置した。
<ul style="list-style-type: none"> 友達に物を渡したり、受け取ったりする。 	<p>教材教具</p> <ul style="list-style-type: none"> 物を介在させることで関わりは生まれるが、視線を合わせるが少ないため、相手を意識できるように、名前を呼んだり言葉を添えたりした。
<ul style="list-style-type: none"> 友達を誘う。 	<p>目標設定</p> <ul style="list-style-type: none"> みんなで一つの作品を作る等、一人ではできないことを目標にした。

V まとめ（子供の力を育てるための授業づくりのポイント）

1 教材教具の工夫

物を操作したり、介在させたりすることで児童の関わりが生まれやすいが、児童の視線の向かい方等に教師が意識を向けていないと、ただ物が動いているだけになることもある。友達を見る、言葉を聞くことの難しい児童には、物を使って一緒に活動を共有することは有効であるとする。

2 教師の関わり

友達と一緒に活動したり、関わったりするために、教師と一緒に活動したり、言葉掛けをしたりすることは、必要である。しかし、児童-教師という関係のみになると、友達へ意識を向けることが少なくなる。そのため、言葉掛けを工夫することや、ときには教師が児童の様子を見守ることも必要であるとする。

3 活動設定と環境設定

二人組や三人組などの小グループで活動したり、役割を分担したりするなど、同じことをする友達や違うことをしている友達がいることへの気づきが、友達との関わりを生むこともあつた。また、互いの活動が見えるように机等を配置することで、同じことをしようとしたり、自分のしていることが

〈小学部6年生 授業づくり〉

正しいかどうか確認したりする様子も見られた。感染症対策をする中で、児童の距離の取り方に配慮し、ときには教師が児童の様子を代わりに伝えることも必要である。

4 集団としての目標設定と、児童それぞれの実態やねらいを明確にすること

実践を重ねる中で、児童が場や活動を共有し活動するために必要な力は何か、友達と関わるために必要な力は何かをできるだけたくさん挙げ、整理する必要性が出てきた。また、整理する過程で、それらには段階性がありそうなこと、また、児童それぞれの持っている力が段階ごとに並んでいるのではなく、凸凹があることが見えてきた。また、児童が関わりをもつためには、活動の場と活動内容の共有がされることが前提となることも分かってきた。6年生という生活年齢を考慮し、集団として何を育てるのか、個々の持っている力を発揮するためにどのような学習内容を計画するのかなど、個々の児童が人と関わるためにどのような力があるのか把握し、何を育てるのかを明確にすることで、教材や教具、教師の関わり方が変わっていくのではないかと考える。

5 いきいきタイムだけでなく、各教科等、教育活動全体との関連性を考えること

場所や活動の共有や、人と関わって学ぶことは、いきいきタイムに関わらず、学校の教育活動全体で行われる。また、各教科等がもつ特性によって指導内容や方法が異なる。そのため、各教科等で友達と学び合うための指導内容や方法も学級内で共通理解するようにしてきた。これにより、いろいろな場面での児童の様子を共有することができた。

3 各学級の授業実践のまとめ

(1) 指導のポイント

今年度の各学級の実践において、共通して効果的だと考えられる指導のポイントを以下の二つに整理した。

- ・幼児児童の主体性が生まれるように工夫したり、主体性を尊重したりすること

幼稚部りす組の実践では、幼児が「やってみよう」や「もっと～したい」という思いをもって遊びに向かえるように、幼児の好きな遊び方や関わり方で遊びに誘うことを大切にしていた。小学部3年生の実践では、児童が絵本のおもしろさを知り、「やってみたい」や「続きを見たい」などと思えるように、教材教具を用意し、授業展開を考えることで、児童が自分の思いや気持ちを表現したり、相手からの働きかけを受け入れたりすることにつながった。これらのことから、幼児児童の主体性が生まれるように、指導内容・方法、教材・教具や教師の関わり方を工夫することが、幼児児童が興味をもって遊びや学びに向かったり、自分の思いを表現したりすることにつながると考える。

- ・幼児児童が、教師や友達に気付き意識できるように、教師の関わり方を工夫すること

相手からの関わりに気付きにくかったり、応じることが難しかったりすることは、自閉症の障害特性の一つである。幼稚部りす組での実践では、教師からの関わりに気付き、期待して見ることができるよう、普段から大きな動きや声で関わったり、「3, 2, 1。」や「せーの！」などの毎回同じ掛け声を合図にしたりすることを心掛けていた。小学部の実践では、友達に注目することができるように、「○○くんが、～しているよ。」と具体的に様子を言葉にして伝えたり、「○○くんは、何をしていたかな。何と言っていたかな。」と問い掛けたりすることを大切にしていた。その結果、友達に注目したり、友達のまねをしたりするようになった。これらのことから、幼児児童が、教師や友達を意識して遊びや学びを深めるためには、教師の関わり方の工夫が大切であると考えられる。

(2) 研究方法についての評価

年度末に、本校職員を対象に、今年度の研究についてアンケートを行った。「各教科等の授業において幼児児童の変容から、目標設定や指導計画、指導内容や指導方法などにおいて効果的であった指導についてまとめること。」について、「できた」、「ややできた」という回答は64パーセント、「できなかった」、「ややできなかった」という回答は36パーセントだった。アンケートの結果を基に、研究方法についての成果と課題を整理した。

<成果>

- ・学級担任、学部の教師と一緒に研究したこと

学級やグループという集団で話し合う中で、それぞれの場面の幼児児童の様子を共有することで、効果的な指導方法を探ることができたという意見や、幼児児童の課題について、学級内で解決案を考えて実行したという意見があった。また、学級単位で勉強会を実施して指導方法の検討を行った学級もあった。これらのことから、学級やグループという小集団で幼児児童の実態を理解して共有し、効果的な指導方法を探り、授業づくりを行うことができたと考えられる。

- ・効果的な指導方法を見付けること

各教科の指導につながる自立活動の指導をする中で、児童の実態に応じた指導のポイントを確認しながら指導方法を検討し、授業改善を行ったという意見や、授業の映像を見返すことで幼児児童の変容を捉え、指導方法を確認することができたという意見があった。また、幼児児童の実態と合わせて指導内容・方法の効果を探ることは良かったという意見もあった。これらのことから、幼児児童の変容から指導方法を検討し、効果的な指導のポイントを探ることができたと考えられる。

<課題>

- ・子供の変容の理由を捉えること

幼児児童の変容を感じながらも、なぜその変容が見られたかという理由まで探ることができなかったという意見が複数あった。また、学級や個人で効果的だと考える指導方法を探したが、実際に効果的だったのか、他の方法もあるのではないかという不安があるという意見もあった。これらのことから、幼児児童の変容の理由を分析し、教師間で共有し指導に生かすことは今後の課題であるとする。

- ・授業改善を行い、効果的な指導方法をまとめること

研究授業を通して様々な意見をもらい授業評価をすることはできたが、評価を基に授業改善まで行うことはできなかったのではないかという意見や、効果的な指導方法を探ることはできたが、まとめることはできなかったという意見があった。また、研究の対象期間が短いのではないかという意見もあった。今回の研究では、各グループ1回の授業研究会を実施し、授業を評価することはできたが、その後の授業改善や効果的な指導方法のまとめについて共有する機会を設定することができなかった。改善した授業の幼児児童の様子を共有したり、効果的な指導方法についてまとめて発表したりする場の設定が必要だったと考える。

4 オンラインでの授業研究会について

先に述べたように、今年度実施した授業研究会は、Web 会議システムをつないで行った。授業研究会を実施した後に、参加職員に対して毎回アンケートを取り、課題点については次の授業研究会で改善するようにした。アンケート結果から、オンラインで授業研究会を実施するためのポイントと課題について次のように整理した。

(1) オンラインで授業研究会を実施するためのポイント

- ・使用する資料は事前に参加者に配布する

事前に指導案や授業研究会の進め方についての資料は配布していたが、各学級で育てたい力を設定した理由やそれまでの授業づくりの経過などについて、授業者が説明する際に使用したスライド資料の配布は行っていなかった。このことについて、授業研究会で使用する資料は事前に配布し、参加者が自由に見ることができるようにしておくことで理解が深まるという意見が多かった。スライド資料を画面上で共有するだけでは、授業者の説明を理解し、協議を深めていくことは難しいことが考えられる。授業研究会で使用する資料は、事前に参加者に配布するか、メール等でデータを送信し、参加者がいつでも資料を確認できるようにすることが大切である。

- ・授業研究会で出た意見はリアルタイムで文字入力して共有する

通常の授業研究会であれば、出された質問や意見は、記録係がホワイトボード等を書くことで、参加者全員で情報を共有しながら協議を進める。しかし、オンラインでは、従来の方法での情報共有は難しく、協議内容を記録したホワイトボードを画面に映して共有する方法を試してみたが、画面に映る文字が小さく分かりにくいという意見が多かった。そこで、ワード等のソフトを使用して、パソコンに協議内容を直接文字入力したデータを画面共有して授業研究会を進めると、記録した内容が分かりやすいという意見が多かった。オンラインでの授業研究会の記録は、パソコンに直接文字入力したものを画面共有すると、参加者全員で同じ情報を共有することができる。

- ・授業の動画はそれぞれの機器で再生する

感染症を予防する観点から、授業の様子は参観するのではなく、参加者は、授業の様子を動画で撮影したものを見て、授業研究会に臨んだ。参加者がそれぞれの機器で動画を再生して視聴したグループと、ホストが動画を再生し、画面共有して視聴したグループがあった。画面共有で動画を視聴したグループ

では、動画再生がうまくできなかつたり、再生できても途中で画面が固まってしまつたりして、トラブルが多かつた。一方、それぞれの機器で動画を再生して視聴したグループは、大きなトラブルがなかつた。授業の動画を視聴する方法は、授業研究会の前に動画をそれぞれの機器で視聴して参加する、若しくは、授業研究会の中でそれぞれの機器で動画を再生して視聴する時間を設けるなどの方法が望ましいと考える。

(2) オンラインで授業研究会を実施する場合の課題

- ・授業の動画は、必要な情報が得られるように撮影する

授業の動画を見て、子供の様子はよく分かつたが、子供が何に対してどのように反応していたのか分からなかつたという意見があつた。また、授業で使用していた教材を間近で見たり、触れたりすることができないため、授業者が教材を提示して、具体的な使用方法について説明してもよいのではないかという意見もあつた。授業研究会の参加者が、授業の動画を見て必要な情報を得て、議論を深めることができるように、子供の様子と、子供が反応している物（教師が提示している教材等）の両方を見ることができるよう動画を撮影したり、授業者が授業で用いた教材について説明する時間を設けたりするなどの工夫が必要であると考ええる。

- ・議論を深めるために、協議の柱を絞る

個別学習や、授業者がある程度協議の柱を立てた授業研究会では、協議の視点を幼児児童一人に向けたり、協議の柱を中心に意見交換をして議論を深めることができたという意見があつた。一方、集団の授業や、協議の柱を立てずに、参加者の意見から議論を深めようとした授業研究会では、話題にする幼児児童を限定したり、協議の柱を絞つたりすることが必要ではないかという意見があつた。オンラインによる授業研究会では、参加者が自由に発言することが難しかったり、参加者同士の意思疎通が難しかったりするため、意見交換に時間を要する。決められた時間内で議論を深めるためには、対象となる幼児児童を1～2名に限定したり、事前に協議の柱を絞つて参加者に意見を求めたりする必要があると考える。